



TITLE:

GRETI, ITI, HODITI : 南スラヴ語方言における3つの移動動詞について

AUTHOR(S):

三谷, 恵子

CITATION:

三谷, 恵子. GRETI, ITI, HODITI : 南スラヴ語方言における3つの移動動詞について. *Dynamis : ことばと文化* 2005, 9: 54-96

ISSUE DATE:

2005-10-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87721>

RIGHT:

GRESTI, ITI, HODITI

—南スラヴ語方言における3つの移動動詞について¹—

三谷 恵子

0. はじめに。

スラヴ語には、古教会スラヴ語 (OCS) 形で *gręsti*, *iti*, *khoditi* となる、「(徒歩で) 行く, 歩く」という移動を表す3つの動詞があった。本稿では南スラヴ語シト方言 (現代標準セルビア・ボスニア・クロアチア語, 以下 SBC) およびチャ方言²におけるこの3つの動詞の形態論的分布および意味的關係を, 共時態ならびに通時態の諸相から検討する。本稿ではこれらの動詞を語彙素として扱う場合には GRESTI, ITI, HODITI と表記し, 実際の出現形を扱う場合には, それぞれ当該の言語の慣習に従った表記を用いる。

1. 共時態。

1.1. 共時的分布について。

古いスラヴ語で「(徒歩で) 行く, 歩く」という移動動詞として用いられた3つの動詞 GRESTI, ITI, HODITI のうち, GRESTI は現代の西スラヴ語および東スラヴ語にはもはや存在せず, 一部の特別な形としてその痕跡が残っているのみである (たとえばロシア語の *grjadushchij* 「来るべき, 近づいて来る」は *grjasti* < **gręsti* の能動現在分詞が形容詞化したもの)。これに対して南スラヴ語の状況を見ると, SBC では *gresti*, *ići*, *hoditi*, また現代標準スロヴェニア語 (以下 SL) では (*gresti*), *iti*, *hoditi* となり, 現在に受け継がれている。しかしそれらの形態統語論的, また意味機能的分布は南スラヴ語諸方言において多少異なっている。

¹ 本稿は科学研究費補助金基盤研究 (c)(一般) 「南スラヴ語史の考察 — 14-15 世紀の言語とその文化史的背景を中心に —」 (課題番号 15520251) の一部をなすものである。

なお本稿で用いる略号は以下のとおり:

PRES. 現在形 PRAES. 単純過去形 I-PP. 完了分詞 (I-分詞) INF. 不定詞 IMPR. 命令形
AOR. アオリスト IMPF. 未完了過去 APP. 能動現在分詞 nom. 主格 dat. 与格 acc. 対格
PREP. 前置詞 SG. 単数 DU. 双数 PL. 複数 M. 男性

² イストラ半島からスプリトまでのダルマチア沿岸部および島部に分布する南スラヴ語方言。疑問代名詞が *ča* になることからこの名称がついた。

まず GRESTI は、比較言語学の知見によれば、ラテン語の *gradior*(to walk, step), リトアニア語 *grįdyti*(to go, travel) などと同族語とし、共通スラヴ語では **grend-*と鼻音が挿入された形で「歩む、行く」を表したとされる (Vasmer; Skok) が、OCS から始まるスラヴの文字言語の記録の中で不定詞の使用例はなく、比較言語学者 Meillet は *gręd-*がもともと不定詞語幹を持たない動詞で、“不定”の意味を表し“定”の意味を表す *id-*(ITI の現在形) と補完的關係にあって ITI の現在時制の範列を形成したと見ている (Meillet 235)³。

GRESTI は SBC では日常的に使用される語彙ではなく、もっぱら ITI(*ići*) が「行く、徒歩で行く、進む」などを表す汎用動詞として使用される。19 世紀以降の記述をたどってみると、シト方言を基盤に SBC の基礎を築いたカラジッチ (Vuk Karadžić 1787-1864) は『セルビア語辞典』の第 2 版 (1852; 語彙項目数 4 万 7 千語) で *gresti* を採用し、訳語として *gehen*(ドイツ語), *ire*(ラテン語) を挙げているが、1818 年の第 1 版 (語彙項目数は約 2 万 7 千語) ではこの語を採用していない。Broz & Iveković (1901) は *gresti* に Karadžić と同じ *gehen* の訳語を示しているが、そこに示されている用例は諺やダルマチアの島から採取された表現で同時代のシト方言の日常的な使用例ではない。さらに同辞書は「この動詞では完了分詞 (I-分詞) と能動分詞、不定詞は使用されない」とも記している。RSHKJ(1967) も *gresti* を見出し語として掲載しているが「古語、詩での使用で *ići* の意味」と語義を記述しており、RSHKNJ(vol.3) でも「*ići*, *hoditi* の意」として見出し語に挙げてはいるがその用例はいずれも 20 世紀初頭までの民謡や詩からのものである。Maretić(1931) は GRESTI について、現在形 *gredem*, *gredeš*, あるいは語幹が短縮された *grem*, *greš*, 未完了過去 *gredijah* などが「南の方言で」日常的に使用されているが、動詞の範列のすべての形式が実現されるわけではないと指摘している (Maretić 246)。Maretić の言う「南の方言」にチャ方言が含まれることは確かだが、シト方言領域の南部で Maretić の時代 (19 世紀末から 20 世紀前半) にこの語彙が日常的に用いられていたかどうかは目下未確認である。また本稿では記述の範囲外とするが、シト方言の北西部に分布するカイ方言でも GRESTI の使用が認められる (Lončarić 123; カイ方言話者との私信)。現代チャ方言の状況については 1.6. で述べる。

以上の 19 世紀以降の辞書、文法書の記述をまとめると、シト方言においては 19 世紀にはすでに GRESTI は日常的に使用される語ではなく、諺や慣用句に残された語彙

³ Meillet はまた GRESTI が接頭辞付加による派生語を形成させない点も指摘している。

になっていたと推測される。

ITIは語根**i-*が印欧祖語**ei*「行く」(リトアニア *eiti*, ギリシャ *εἶμι*, サンスクリット *eti*)に由来し、やはり主として徒歩での(定方向への)移動・進行を表す語であったとされる(Skok I:707)。ITIは東、西スラヴ諸言語においても使用され、また接頭辞の付加された多くの派生語を持つことから、スラヴ語の語彙層の中心的な位置にあった要素であろうと推測されるが、SLでは不定詞 *iti* の現在時制として本来の現在形 *id-(idem, ideš)* は使用されず、GRESTITIの現在形 *gre-(grem, greš, gre)* が範列の代替要素として用いられる。

HODITIの語根**hod-*については印欧祖語に遡る起源は確定されない⁴が、ITIと同じようにすべてのスラヴ語にはほぼ同じ形の語彙があり(チェコ *chodit*, 上ソルブ *chodzić*, ポーランド *chodzić*; ロシア *khodit'*, ウクライナ *khodyty*; ブルガリア *khodja*)、現代の東・西スラヴ語では主として方向を特定しない徒歩での移動「歩く、行き来する」の意味を表すことから、もともと「徒歩で行く、歩む」を主たる意味とする動詞であったと考えられる。SBCで *ići* の完了形(I-分詞)として用いられる *išao, išla* の語根部分**š-*はITIの完了形あるいは過去時制形として広くスラヴ語に共通する形式(SLでは *šel, šla*)だが、これは *hoditi* の語根**hod-*のゼロ階梯**h-*に由来する。SBCの *išao, išla* に見られる語頭の *i-*は *ići* の諸変化形(不定詞 *ići*, 現在語幹 *id-*など)からの影響で添加されたものである(Skok I.707-708)。

SBCには、徒歩での移動を表す動詞としてさらに *hodati* がある。この動詞もHODITIと同じ語根**hod-*に由来するが、語幹形成母音に *i* が現れるHODITIは上記のとおり広くスラヴ語に見られ、古い語形であることが推測されるが、*hodati* は南スラヴ語方言のどこかで独自に形成されたと考えられる。次節1.2.に見るようにSBCで *hodati* は一定の頻度で用いられるが、通時的に見るとその出現はそれほど古くはない。Skokはこの動詞を14世紀頃からの語彙としているが、その根拠となっているのはDaničić(1863-64:Vol.3: 418)が示している用例: “ne smêše slobodno hodati po carevi zemlê” 「皇帝の国の中を自由に通行してはならなかった」であろうと考えられる。この用例の出典は14-15世紀のシト方言文書⁵であり、おそらくこれが資料で検証される最も古いものに属すると判断してSkok(I:675)はSBCにおけるこの形を14世紀以後としたものと考えられる。

⁴Vasmerは**sed-*を語根とし、接頭辞付加された形から *hod-* が二次的に形成されたとする。

⁵Spomenici srbski od 1395 do 1423. To est pisana od Republike Dubrovačke. Knez M Pučić. Beograd: Knjigopечатitja knjazestva. 1858.

シト方言以外の南スラヴ語に目を向けると、SL ではSSKJに *hodati* という語彙は掲載されておらず、また現代スロヴェニア語コーパス (http://bos.zrc-sazu.si/a_beseda.html), ならびにスロヴェニア語最古の文献である *Brižinski spomeniki* (『フライジング断片』972~1000 年頃) から現代までのスロヴェニア語テキストを集めたスロヴェニア文学コーパス (<http://www.ijs.si/lit/leposl.html>)⁶のいずれでも、*hodati* の用例を見つけることはできない。チャ方言でも、16 世紀以来の伝統文学のコーパス (RN, PS, DR), また ČDL をはじめとする記述研究を見ても *hodati* の用例やこの動詞についての言及はない。ブルガリア語、マケドニア語においても、少なくとも現代語の辞書記述やコーパスの中には **hoda-* のような *a*-母音を持つ語形は見られない (Popov 1994; Bojanova & Ilieva 2003; Dimitrovski, 1994; Corpus of spoken Bulgarian)。以上を総合すると、*hodati* 形がシト方言以外のどこかの地域で発生しかつシト方言以外の地域では消失してシト方言でのみ残ったという可能性は考えにくく、おそらく中世中頃にシト方言地域のどこか (おそらくは西南部) で発生しこの地域で局地的に用いられてきたものであろうと推察される。現在カイ方言でも *hodati* は用いられる (Lipljin 235) が、隣接するスロヴェニア語やチャ方言に *hodati* があったと思われる証拠がないことから考えると、シト方言からの影響という可能性が強く考えられる。したがって *ići* に競合する移動動詞として *hoditi*, *hodati* という 2 つの形を共時的に持つのは基本的に SBC(シト方言) だけの特徴ということになる。

hodati は語根の「歩み」という意味を受け継ぎ、辞書によれば基本語義は「徒歩で移動すること」であるとされる (RSHKJ 6; HER)。またこれらの辞書では *ići* と同じように、物事の進行についても用いられる (たとえば HER では *hoda sve u redu* 「すべてはうまく運んでいる」という例を挙げている) と記されているが、筆者の知る限り、実際には人 (あるいは歩行動物) を主語とした空間的移動においてもっぱら用いられているようである⁷。

以上から、本来スラヴ語にあった 3 つの移動動詞 GREŠTI, ITI, HODITI の形態的關係を SBC, SL およびチャ方言の共時的分布からまとめると、下の〈表 1〉のようになる:

⁶17 世紀以後のものは文学作品である。

⁷最も日常的な *hodati* の使い方は「歩く」のほか「(男女が) つきあう」「デートする」であるように思われる。

〈表 1〉 GREŠTI, ITI, HODITI の形態的關係

| CS | OCS | SS | | SBC | | SL | |
|---------|---------|-----------|----------|-----------|-------|-----------|-------|
| 語根 | INF. | PRES.3SG. | 1-PP. | PRES.3SG. | 1-PP. | PRES.3SG. | 1-PP. |
| *greNd- | *grešti | grede | (?) | —— | —— | gre | —— |
| *i- | iti | ide | š'l | ide | išao | —— | šel |
| *h'd- | | | (*š'dl') | | | | |
| hod- | khoditi | hodi | hodil | hodi | hodio | hodi | hodil |

CS: Common Slavic SS: South Slavic

1.2. 定・不定。

ITI と HODITI はスラヴ語の多くで、移動の方向性に関する「定」「不定」で対立する。定動詞と不定動詞の対立が体系的に際立っているロシア語を例にとると、定動詞と不定動詞の対を形成する移動様態動詞には *idti/khodit'* (徒歩で行く), *ekhat'/ezdit'* (乗り物で行く), *bezhat'/begat'* (走る), *letet'/letat'* (飛ぶ), *plyt'/plavat'* (泳ぐ, 航行する), *lezt'/lazit'* (這って進む) などがあり, また他動詞である使役移動様態動詞には *nesti/nosit'* (持ち運ぶ), *vesti/vodit'* (導く), *vezť/vozt'* (乗り物で運ぶ) などがある。いずれも対の前者が定方向への移動を表し, 後者は方向を特定しない移動 (歩き回る, 飛び回る, 走り回る, あるいは行き来する, 運行する, など) を表す。一見して明かなように *idti/khodit'* 以外はいずれも同語根から形成されており, 状態や反復などの動作様相的意味を語幹母音の違い (-e-ti, -i-ti) で表していた共通スラヴ語時代の特徴を反映していると考えられる (Meillet 229-231; Ivšić 348)。

一方, 現代の南スラヴ語の状況を見ると, SL では *iti/hoditi* をはじめ *bežiti/begati*, *nesti/nositi* など, ロシア語と同じように定動詞/不定動詞の関係を保つ移動動詞の組がある (Toporišić 351; Vincenot 225) が, 以下に詳述する SBC と同じく, ロシア語の *ekhat'/ezdit'* 該当する語彙はなく, 乗車での移動を明示したい場合には *peljati*, *voziti* などの「運転する」という意味の語彙を用いている。SBC では, 他のスラヴ語に見られるような移動動詞の定/不定の体系的な対立は根本的に崩れている。ロシア語の *idti* に対応するのは *ići* であるが, *khodit'* に対応すべき動詞 *hoditi* はロシア語と同じような意味で *ići* と対立する動詞としては用いられない。先に述べた *hodati* も定動詞/不定動詞のペアをなして *ići* と体系的な関係をなす動詞ではない。またロシア語の *ekhat'* に対応する語は, この動詞がもともと表していた「騎馬で進む, 馬に乗る」と

いう意味の *jahati* という語彙で残っているが、文字通り「馬に乗る」という意味でしか用いられない。列車や自動車などの乗り物を使用する移動に特に用いられる移動様態動詞はなく、車で移動することを明示したい場合には *voziti* (*se*) 「運転して行く、乗り物に乗る」という動詞が用いられる。また *nesti*, *vesti* 形の定動詞や、*begati*, *letati* 形の不定動詞は現代語にはなく⁸、これらの動詞は接頭辞が付いた形でのみ用いられる (**vesti* – *odvesti*, **letati*–*sletati* など)。

SBC で *ići* と *hoditi* が定動詞と不定動詞という移動の定方向性に関する対立において相互に価値づけられるものではないことについて、*Ivšić* は「もしこの区別が保たれていたなら今日 *brat ide u školu*(弟は学校に行っている) と言うところは *brat hodi u školu*(弟は学校に通っている) と言わなければならなかっただろう」(*Ivšić* 348) と記述している。事実、この短い記述に示唆されるように、*ići* はいかなる制約もなしに不定方向への移動あるいは往復移動を表すことができる。このことについては 1.5. で詳しく検討するが、それに先立って、これらの動詞を標準語の語彙総体 (*lexicon*) の中の使用頻度という点から特徴づけておきたい。

すでに明らかにしたように、現在の SBC には *ići*, *hoditi*, *hodati* という 3 つの「(歩いて) 移動する」ことを表す動詞がある。しかしこれらの語は同程度の頻度で用いられるわけではない。現代クロアチア語の頻度辞典 *HČR*⁹ で *ići*, *hoditi*, ならびに *hodati* の使用頻度を見るとこれらの動詞はどれもジャンルの異なる 5 つのコーパスのすべてで使用されているが、使用頻度には以下の〈表 2〉のような差が見られる：

〈表 2〉 *HČR* による *ići*, *hoditi*, *hodati* の頻度

| | <i>ići</i> | <i>hoditi</i> | <i>hodati</i> |
|--------------|------------|---------------|---------------|
| 用例数 | 823 | 38 | 151 |
| 順位 (全 569 位) | 114/569 | 534/569 | 419/569 |

ちなみに同じ頻度辞典で *gresti* は戯曲と散文に 1 例ずつ計 2 例 (568/569 位) が掲載されている。

次に現代セルビア語のサンプルとして *ASP*¹⁰ を調べると、*hoditi* の使用は 7 例 (命令形 4x, 現在形 1x, 1-分詞 2x) のみ、*hodati* も全体で 19 例 (現在形 15x, 1 分詞 3x, 能動分詞 1x) であった。一方 *ići* は現在形だけで 132 例が認められた。また現代ボスニア

⁸ *nesti* は *kokoš nese jaje* 「雌鳥が卵を抱く」のような定型句でのみ用いられる。

⁹ 1970 年代前半までの戯曲、新聞記事、散文、韻文 (詩)、教科書の 5 種類の異なるコーパス各 20 万語から採集した 100 万語の頻度をまとめたもの。

¹⁰ 1852 年から 1998 年までの間に発表された 35 人の作家の計 46 の短編を集めたもの、全約 800 ページ。

語の傾向については、サラエヴォの週刊誌 Dani のウェブサイト¹¹から検索を試みた。その結果 hoditi の 1-分詞男性単数形 hodio を検索すると 20 件が得られたのに対して、全く同じ検索条件で hodati の 1-分詞男性単数形 hodao を検索すると 58 件、ici では 1-分詞男性単数形 isao で 282 件を検索することができた。これらの数値は多少性質の異なる資料体から抽出された大まかなものではあるが、SBC のどの標準形でも頻度に関しては

ici > hodati > hoditi

という序列が成り立つことが示唆される。ici と hoditi の使用頻度差は、HČR のデータを単純に計算して 1 対 0.047、ASP では ici の現在形と hoditi の全変化形という不均衡な比較でも 1 対 0.053、Dani のサイトの場合もおおよそ 1 対 0.07 と、いずれも使用頻度にかかなりの差があることを予測させるものとなっている。

SL では、日刊紙 DELO のサイト¹²から検索した結果、iti の 1-分詞過去形šel は 169 例、一方同じ検索条件で hoditi の 1-分詞過去形 hodil は 43 件と、SBC と同じように iti に比べ hoditi の使用頻度が低いことが示唆される。しかしその比率は 1:0.25 であり、この検索の範囲では SBC ほどの差はない。ちなみに ITI と HODITI の意味的対立が体系的に確立されているロシア語の場合を見ると、Zasorina(1977) のデータで idti が 1818 に対して khoditi が 415(比率は 1:0.23)、また Lönngren(1993) のデータ(絶対数データ)で idit が 1140 に対して khoditi が 297(1:0.26) となり、DELO から検索した iti と hoditi の比率と比較的近い値を示す。HODITI は ITI と空間的移動の方向性の有無で対立するが、ITI は空間的移動以外にも事象の進行や主語の状態変化などより広い文脈で用いることのできる動詞である。したがって ITI が HODITI より広い意味領域を表すことを前提として、仮にその意味負担の差がロシア語やスロヴェニア語のおおよそ 1 対 0.25 すなわち 4 対 1 ほどであると仮定すると、SBC の比率は ITI との比較において HODITI の意味負担量がかなり低いことを示していることになる。逆に言えば、SBC では HODITI が表すべき意味を ici, hodati あるいは他の語彙が肩代わりしているということになる。

1.3. 事象タイプ。

次節以下の具体的な考察に先立ち、移動事象を事象タイプとして記述するために関

¹¹<http://www.bhdani.com/>

¹²<http://www.delosi.si/>

与的な意味特徴について述べる。

1.3.1. まず「定方向の移動」と「不定方向の移動」について、以下のようにインフォーマルに定めておく:「定方向の移動」とは、移動者 (Mover) が起点 (S[ource]) から出て、一定の空間すなわち経路 (P[ath]) を経て着点 (G[oa]) に至る、あるいはそれをめざす移動として概念化された事象であり、一方「不定方向の移動」とは“～から…まで”という移動者の空間的な推移が概念化されないような、一定の空間的広がりにおいて行われる移動である。実際の言語表現において起点や着点が明示されるかどうかはここでは本質的な問題ではなく、予定された、あるいは潜在的な着点が事象の概念化の中に組み込まれているかどうかの問題となる。したがって定方向の移動かそうでないかは、発話状況あるいは与えられた文脈の解釈に依存して決定されることがありうる。

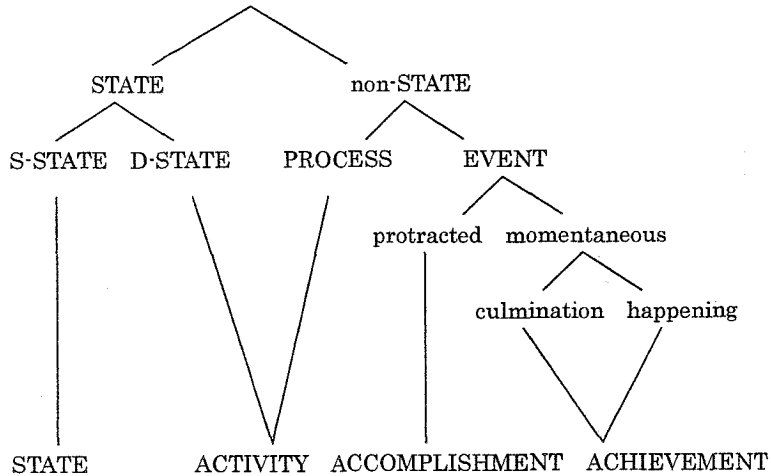
往復移動の場合、ならびに定方向性の移動と不定方向性の移動の複合事象の場合については後続する 1.3.2 で述べる。

1.3.2. 動詞の事象タイプの研究では Vendler の 4 分類 (Vendler 1967) 以後、事象の終結性の有無といった特徴に鑑みて動詞あるいは動詞句をタイプ分けする試みがさまざまな形でなされてきた。その中で Bach (1986) の動詞述語の分類は、定方向の移動と不定方向の移動の違いを事象タイプの違いとして取り込もうとする本考察には有効であると思われる¹³。Bach は動詞句の表す事象をまず<状態 STATE>と<非状態 non-STATE>に分割し、<状態>をさらに<動態的 dynamic>と<静態的 static>に下位区分する。また<非状態>は<過程 PROCESS>と<出来事 EVENT>に、さらに<出来事>は<伸展的 (protracted)>と<瞬間的 (momentaneous)>に分割される。<瞬間的出来事>は<極限 (culmination)>と<偶発 (happening)>に分けられる。このタクソノミーでは、Vendler の<活動>は、<動態的状态>と<過程>の二つのクラスに分割され、また Vendler の<到達 achievement>は、それ自身がさらに<極限>と<偶発>に下位区分される<瞬間的出来事>に対応し、Vendler の<達成 accomplishment>は<伸展的出来事 (protracted Event)>に該当する。Bach の<静態的状态>と<動態的状态>の区別はおおむね、個体レベルと段階レベルにおける属性の違いに比せられ、「所有する (own)」「似ている (resemble)」「好く (love)」などの<静態的状态>が個体の属性を表すのに用いられるのに対し、sitting「座している」、

¹³主に英語を基準として行われてきた事象構造分析は、体 (アスペクト) を動詞の語彙文法カテゴリーとして持つスラヴ語動詞の分析には直ちに援用できないという問題がある。しかし本稿で扱おうとする動詞はいずれも不完了体で、完了体との体の意味の対立という問題が生じないので Bach の区分は適用しやすいと考えられる。

standing「立っている」などの語形で表される事象は、個体のある一時的な状態、「メレオロジー的に言えば個体の時間的に限られた真部分¹⁴」を表すとされる。Vendler で<活動>に含まれる walk, push a cart, sleep などの事象は<非状態>の下位区分に含まれ<過程>と特徴づけられる。

Bach(1986) の事象タイプ分類 (下は Vendler の対応)



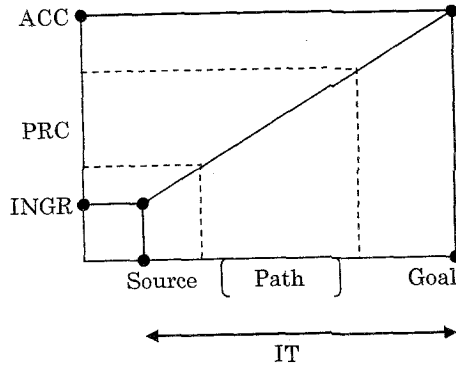
この区分を本稿の考察課題である移動事象にあてはめると、不定方向への移動は<動態的状态>に、定方向への移動は<過程>あるいは<出来事>に含まれることになる。以下にこの関係を説明する。

動詞句が表す事象と、そこに含まれる名詞句の関係について<準同型 homomorphism>の写像という概念を導入することに成功した Krifka(1986) を援用すれば、移動事象では、事象の推移と、移動によって到達される空間の推移の間に準同型の関係が生じることになる。準同型の関係とは「定義域において定義される何らかの構造的関係が、値域において定められる類似した関係に保存されるもの」であり Dowty によれば、終結性のある (telic) 述語であればその「保存される関係」は「部分の」関係である。すなわち「もし x が y の部分であるなら、そしてもし終結性の述語が y(= Theme) を事象 e に写像するなら、その述語は x を事象 e の部分である e' に写像しなければならない

¹⁴In mereological terms we can identify the manifestation of an individual with some temporally limited proper part of the individual. (Dowty 1991:567) mereology (メレオロジー) とは部分と全体、あるいは全体における部分間の関係に関する論理的理論。発生は古代ギリシャに遡るが、ブレンタノ、フッサールを経てポーランドの レシニェフスキの Foundations of a General Theory of Manifolds (1916, in Polish) によって現代論理学の中に確立された。

い」¹⁵。

ここに、すぐ後に述べる＜増加的主題＞の概念を導入すると、定方向性の移動事象は次の図のようにイメージ化される：



＜増加的主題 (Incremental Theme, 以下 IT)＞とは、Krifka を取り込んだ Dowty の用語で、「事象の“部分”である下位事象の識別可能な個別の段階において、特定の状態変化を被ることが必須であるような項」(Dowty 568) を意図する。この考え方を援用し、まず IT を起点 (S) から経路 (P) を経て着点 (G) に至る移動の空間全体としよう。IT の推移は移動事象の推移に写像されるので、移動事象とその各部分は次のように定められる：IT の部分である経路 (P) は、移動者が起点から離れてある方向に向かって移動している段階に写像される。この段階は Bach に基づく事象タイプの下位区分では＜過程 PR[o]C[ess]＞の局面に対応する。また IT 全体、すなわち着点 (G) にまで及ぶ移動空間は、移動者が移動の終結点にまで至る事象に写像され、＜達成 ACC[omplishment]＞(Dowty の「伸展的出来事」だが、本稿以下では便宜上 Vendler の用語を用いる)＞事象となる。IT の開始点すなわち移動の起点 (S) は、移動者が静止状態から移動に移行する始動 INGR の局面に写像され、事象タイプでは(静止状態)から(移動)という＜極限的出来事＞となる。本稿では記述の便宜上 Bach の用語を一部変更して用いるので、混乱をさけるために今一度これらの関係をまとめると次の＜表 3＞のようになる：

¹⁵ “A homomorphism is a function, from its domain to its range, which preserves some structural relation defined on its domain in a similar relation defined on its range. In the case of telic predicates, this relation which is preserved is the “part-of” relation: if x is part of y , then if a telic predicate maps y (as Theme) onto event e , it must map x onto an event e' which is part of e ” (Dowty 567)

＜表 3＞ I(ncremental)T(heme) の部分と事象部分の対応

| IT の部分と名称 | 事象の部分 | Bach の区分 | 本稿での名称 (略号) |
|--------------------|-------|-------------------|------------------|
| 開始段階 起点 (S[ource]) | 始動 | culminative Event | INGR(essive) |
| 中間段階 経路 (P[ath]) | 過程 | Process | PR(o)C(ess) |
| 終結段階 着点 (G[oa]l) | 終結 | protracted Event | ACC(omplishment) |

定方向への移動は、当該の発話状況の中で上記のどの局面が取り出されるか、つまりどの部分が焦点化されるかによって、INGR, PRC, ACC のいずれかの事象タイプとして表出されるが、いずれにしても着点の存在を含意する終結性の事象の部分である。言語表現の側からとらえれば、IT の部分の明示はその移動が定方向性をもつものとして概念化されていることの標識となる。

これに対し、不定方向の移動には起点や着点という IT の構成要素は含まれない。というのも、本稿ではそもそも不定方向の移動を、「*彼は家から公園まで歩き回った」とか「*太平洋上を横浜からサンフランシスコまでさまよった」というようなことが概念化できない事象として定義したからである。不定方向の移動でも、時間の推移とともに移動者の物理的移動量もしくは運動量は増加するが、この場合の「増加」は定方向の移動における IT の増加とは本質的に異なるもので、不定方向の移動事象の下位部分はどこをとっても (観察される時間内において) 均質であり、その意味で状態的である (cf. Filip 43)。従ってこれは Bach の＜動態的状态 (D-STATE)＞に該当する。

上記の特徴づけに従えば、日本語の「さまよう」という動詞は不定方向の移動を表すということができる。したがって、かりに「さまよって (さまよいながら) 目的地に到達した」というような表現が可能であるとしてもそれは、不定方向の移動 (「さまよう」) 事象が、より上位の方向性のある移動事象の中に埋め込まれた結果か、あるいは「さまよう」という、通常は不定方向の移動を表す語彙が特別に定方向の移動を含意して用いられているかのどちらかであると考えられる。

移動の方向性の有無を IT の有無との写像的關係として理解すると、「通う」「たびたび行く」のような、着点を含む移動の反復については、移動事象がタイプとして把握されるか、トークンの連続として把握されるかによって定方向にも不定方向にもなりうるという形でとらえることができるだろう。つまり反復される事象の中の一回一方向の移動をタイプとして取り上げ、IT を持つ移動として表出すれば定方向への移動となるし、個々の移動をトークンとしてとらえ、事象全体をそのトークンの連続として把握するのであれば非終結性の動態的状态となる。後者の場合、一回の移動の着点はトーク

ンの中に含まれ、より上位の状態事象の中に埋め込まれてしまうので、事象全体においては IT の標識として機能しなくなる。たとえば定方向性の移動と不定方向性の移動が ITI(GREŠTI) と HODITI で区別される SL では “Iva je šla z vneemo v šolo” 「イヴァは大喜びで学校へ行った」と “Iva je z mnoj hodila v šolo” 「イヴァは私と一緒に学校へ通った」のように、「学校に通う」という反復移動を ITI, HODITI どちらの動詞でも表現できるが、定動詞 ITI が使用される場合には「学校」という着点を持つ一回の移動がタイプとして表出され定方向の移動になるのに対して、不定動詞 HODITI が使用される場合には、トークンの連続としての「学校に通っている」という状態が表出されると解釈できる。

移動の定方向性を IT の写像としてとらえるという立場から再度、移動事象の特徴をまとめると次のようになる:定方向性の移動は+IT ($\{S\}\{P\}\{G\}$)¹⁶によって特徴づけられ、不定方向の移動は-IT という特徴を持つことになる。言語表現上、たとえば「私たちは彼の後を歩いた」のように、方向性について情報を与えず、より大きな文脈に参照しなければ IT のある移動かそうでないかわからない場合がある。こうした場合については(本稿の議論では用いないが) α IT という暫定的な表記が可能であろう。 α は前後の文脈あるいは語用論的解釈によってプラスまたはマイナスの値を取りうる代替記号である。IT がない不定方向の移動では P(ath) ではなく、移動の行為が生じる<場所 L(oc)>が移動空間の要素として組み込まれることがありうる。

<表 4> 事象タイプと, ići を含むそれらの例

| 事象タイプ | | ide (ići 「行く」 PRES.3SG.) |
|-------------|--------------|---|
| +IT | INGR {S} | ide odavdje(S) ここから出て行く |
| | PRC{P}{G} | ide kroz šumu (P) 森を通って行く ide prema trgu(G) 広場へ向かう |
| | ACC{S}{P}{G} | ide na planine(G) 山に行く ide do grada (G) 町まで行く |
| -IT | D-STATE{L} | ide ulicama(L) 通りをさまよう |
| α IT | PRC/D-STATE | ide s njima かれらと一緒に行く |

1.4. 移動者と様態。

1.4.1. 移動事象においては、何が移動の主体になるかも重要な要素になりうる。移動

¹⁶ { } は S, P, G それぞれのゼロ回または 1 回の明示的表現が含まれることを意味する。

の主体すなわち移動者 (Mover) に注目すると、空間的移動の意味で *ići* の主語になれるのは人のほか動物、また乗り物などである:

Po zapovijedi svog vodiča, pas tragač ide po najnepristupačnijim terenima
(*Slobodna Dalmacija*, 19.05.2000)

主人の命令にしたがって 搜索犬 は最も人が近づきにくい現場に行く。

Previše vozača zaboravlja da ponekad vlakovi idu i više od 100 km/h
(*Večernji list*, 04.04.2005)

列車が 時に時速 100 キロを越えて走行することを忘れている運転手が多すぎる。

Brod je išao od mesta Manau do prestonice države Belem
(*Dnevnik online*, 20.12.2002)

船は マナウの町から首都のベレムまで航行中だった。

ići はまた、物事の進行あるいは主語の状況の変化など、空間的移動より拡張された意味で用いられる。この場合主語は人でも事物でもありうる:

Iako su im poslovi slabo išli, radovali su se budećem članu naše porodice.
(*Savić, Ujak naše varoši*)

かれらの 仕事は 細々としか進まなかったが、それでも私たちの家族の未来の一員のことを喜んでいた。

Univerzitetsko školovanje u Albaniji ide prema promjenama.
(*South Slavic Homepage*, 06.04.2005)

アルバニアの 大学教育, 改革に向かう。

INA i HEP idu u privatne ruke (Slobodna Dalmacija, 16.05.2000)

INA と HEP, 民間の手に移行。

このように *ići* は主語に活動体名詞、事物、現象のいずれをとることもでき、活動体や事物の場合には空間的移動あるいは主語の状態や状況の変化を表すことができる。

hoditi, *hodati* の場合には、主語は基本的に人であるが、*pas hoda po sobi* 「犬が部屋の中を歩き回る」、*na četiri noge hodi* 「四つ足で歩く」のように歩行動物の移動についても用いることができる。また *ići* と同じように物事について「進行する」「続く」の用法があるとされる (HER 445; RSHKJ vol.6, 739) が、この意味での使用に出会うことは実際にはあまりない。

以上のように、*ići*, *hoditi*, *hodati* の移動者は、人、動物、また事物、事象などであり

得る。以下では最も中心的なケースである人を主語にした空間的移動を表す場合に焦点をあててその用法について検討する。

1.4.2. 「移動の様態」という場合、移動に随伴する移動者の行為や姿勢(たとえば「転がる」「飛び跳ねる」「這う」など)を指すことがしばしばあるが、ここで「様態」として関与的とみなすのは移動の方法(徒歩, 乗車, 飛行など)と媒体(車, 飛行機, 船など), 速度である。

まず *hoditi*, *hodati* は、人に関して使えば徒歩での移動を含意する動詞である。したがってこれらの動詞が表す様態は「歩く」であり、その他の移動媒体との共起(**hodi avionom* 飛行機で歩く, **hoda autom* 車で歩く)はない。これに対して *ići* では移動の様態は語彙意味として特定されない。そこでまず、単に移動の有無そのものを問題とする場合に用いることができる:

Karla del Ponte ne ide na komemoraciju u Srebrenicu.

(*Radio Crna Gora*, 06.07.2005)

カルラ・デル・ポンテはスレブレニツァの追悼記念式典に 赴かない。

ハーグ国際法廷の主任検察官であるデル・ポンテ氏がボスニアのスレブレニツァに赴くとしたら、当然飛行機か車か何らかの乗り物を使うだろう。しかしここでの問題は移動の有無ということであり、このような状況で ITI が使用されることは、移動手段が関与的ではない移動についてこの動詞が用いられることを示しているといえるだろう。

このように、動詞それ自体が移動の様態を特定しないために、移動手段を表す名詞と共起し、移動の様態を句レベルで表示することができる。移動手段は陸上, 水上, 空中のどのようなものでもよい:

Dogovorili smo se da idemo avionom UNPROFOR-a. (*Dani*, 31.01.1995)

私たちは UNPROFOR の 飛行機で行く ことで話をつけた。

Ako putuješ avionom, kupiš avionsku kartu; ako ideš vozom, odeš na željezničku stanicu (Website)

もし飛行機で行くなら航空券を買うさ。列車で行く なら駅へ行くんだな。

Učenici od 1. do 4. razreda išli su autobusom, a “veliki” biciklima. (Website)

1年生から4年生までの生徒は バスで, 「大きい」子たちは 自転車で行った。

乗車での移動を語彙で区別するロシア語では, *idti/khodit'*(徒歩) と *ehat'/ezdit'*(車や列車) が使い分けられるが, *ehat'/ezdit'* に該当する動詞がない SBC では *ići* が手段

を問わず移動を表す無標の動詞として用いられる。車両（自動車，列車など）での移動の意味を動詞の語彙として表すためにはロシア語の *vesti/vozit'* と同族語である *voziti* を用いる（人が乗り物で移動する場合には再帰形で用いられる）：

Vozili smo se kroz zelene šume. (Website)

私たちは緑の森を車で通り抜けて行った。

移動の様態のうち、速度の特徴も *ići* 単独では表現されない。ただし歩行移動である場合には、慣習的に「歩く」（走るではなく）という意味を表す。これは

Više trči nego što ide. (Bozović, *Ratne ljubavi*)

歩いて、というよりは走って来る。

のように「走る」という動詞との対比で用いられるときに明確になる。

1.5. 移動事象の諸局面。

この節では 1.3. で定めた事象タイプの区分に従いながら、ITI, HODITI, HODATI の表す移動の諸局面を記述する。

1.5.1. 過程 (PRC)

まず、IT のいかなる部分も明示されない例を見よう：

je bilo nemoguće zamisliti da neko ide na jednoj nozi.
(Selimović, *Derviš i smrt*)

誰かが片足で 歩いて行く などと想像することはできなかった。

ここでは移動の様態を表す前置詞句 (na jednoj nozi 片足で) によって移動行為そのものが焦点化されているのみである。*ići* は単独では定方向/不定方向のどちらかの意味を表す語彙ではないので、所与の文だけでは移動の方向性についての情報は与えられない。しかしここで文脈を参照すると、近づいて来る足音について語られる場面であることがわかり、＜過程＞すなわち定方向性の移動が意図されていると理解できる。

経路が示されると、＜過程＞であることが明らかになる：

Nigdje nema nikog, samo on jedan jedini ide preko biskupskog trga.
(Krlježa, *Povratak Filipa Latinović*)

どこにも誰もおらず、ただ彼一人が 主教区広場を横切って歩いていた。

Hajka je minula, neka ide svojim putem. (Selimović, *Derviš i smrt*)

騒ぎは静まった。あの男は自分の道を行けばよからう。

上の2例のように、経路は preko +G(横切って), kroz+A(通って),あるいは po+L(沿って)などの前置詞句によって示される。また過程の下位タイプとして着点へ向けた移動を表すことができる。これは prema+D(～にむけて)といった向格的 (allative) 前置詞句や与格名詞句で表され、定方向性の意味を明確にする:

idem prema zgradi Filozofskog fakulteta (Dom i svijet, br. 400)

哲学部の 建物の方へ歩いて行く と

jer je sa testerom išao prema svojoj srušenoj kući i posjećenom šljiviku

(Veličković, *Šljiva, ili Kako napisati priču*)

というのも彼はチェーンソーを担いだまま 自分の崩れた家と切られたプラムの木の方へと行ってしまった からだった。

1.5.2. 始動 (INGR)

ići は始動の局面に焦点をあてることができる:

Ja ne želim da idem iz ove zemlje.

僕はこの国から 出て行き たくない。

ここでは起点 (iz ove zemlje この国から) の表示が始動の意味を際立たせている。こうした始動の意味の ići は接頭辞付加された otići(od+ITI 出て行く, 出かける) あるいは izaći (iz+ići) によって置き換えることが可能である:

Ja ne želim da odem iz ove zemlje.

起点の表示がなくとも, 1, 2 人称現在形および命令形はそれだけで始動の意味を表すことができる。

— Treba da ideš — rekao sam šapatom.

「君は 行かねば」私は囁き声で言った。 (Selimović, *Derviš i smrt*)

Zbogom, Bibi! Ja idem! (Krlježa, *Povratak Filipa Latinovića*)

それじゃ、ビービー、行くよ。

1.5.3. 達成 (ACC)

本稿の定義では達成は、着点への到達が概念化された移動である。したがって着点の表示は、実際にそれが実現されるかどうかにかかわらず達成の局面を表すことになる:

morate “peške” da idete do sledeće stanice. (*Ilustrovana Politika*, br. 2416)

次のステーションまで「徒歩で」行かなければなりません。

過去時制では達成の意味は明瞭である:

Išao sam jutros u polje, peo se uz iscvjetalo brdo [...]

(Selimović, *Derviš i smrt*)

今朝私は野に出て, 花の咲き乱れた丘陵を上り [...]

Kasnije sam išao do Bašcarsije da pojedem čevape i pite.

(*Dani*, 23.03.2001)

もっと後になって バシチャルシアまで行ったよ, チェヴァプとピタを食べに。

着点を持つ反復移動も *ići* によって表される:

Kak često idete u biblioteku?

どれくらいの頻度であなたは 図書館に行きます か?

Nisam više ni redovno išao u crkvu.

私はもう, 教会へも通わなくなった。

すでに再三述べたように SBC の *ići* は方向性について制約を持たない動詞である。したがってこの動詞によって表される反復移動が定方向の移動か, あるいは不定方向の移動すなわち動態の状態かという問題はそもそも意味をなさないとも考えられる。しかし SBC には「通う」という反復状態を表す動詞 *pohađati*¹⁷ という動詞がある。語彙は互いの示差の関係によって体系的に価値をもつという解釈に基づけば, *pohađati* を用いないという理由において反復移動の *ići* を定方向性移動の意味と解釈することが可能であろう。

1.5.4. 不定方向の移動 (-IT)。

1.5.1~3. で, 定方向性の移動の異なる局面を表す *ići* の用例を見た。しかし *ići* によって不定方向の移動を表すことも可能である:

Kao malu su je terali da ide po gradu i prosi. (Website)

幼い彼女は 町中を歩いて 物乞いをするように強いられた。

Dok smo mi u srednjoj školi išli autostopom okolo (Zarez, 29.03.2001)

¹⁷やはり語根 *hod-からの派生動詞で接頭辞 po-を付加しさらに不完了体接尾辞を付加して形成された。

僕らが高校時代ヒッチハイクで あちこち に行っていた 頃

ここでの *po gradu* や *okolo* は移動経路ではなく場所 (L) を表す名詞句である。

1.5.5. *hodati, hoditi*

hodati, hoditi は「徒歩」での移動であることを語彙意味として含む。移動の方向は定でも不定でもありうる。次の例ではいずれも移動の場所 (L) を表す名詞句がともに用いられている:

On već čitavo poslijepodne hoda ulicama(L) kao hijena! (Kreža, *Vjetrovi*)
彼はすでに午後中ずっと、通りから通りへと ハイエナのように 歩いていたのだ !

Oholo su zemljom(L) hodili i ružne spletke pleli. (Selimović, *Derviš i smrt*)
かれらは高慢に国中を歩き、おぞましい陰謀を企んできた。

kad je dobri Richard Holbrooke posljednji put Srbijom(L) hodio (Dani, 01.26.2001)
リチャード・ホルブクロク氏が最後に セルビア各地を回って歩いた とき

最後の例では、ホルブクロク氏が文字通りセルビア中を徒歩で回ったわけではないだろうが、実際に自ら足を運んで各地を視察した様子を *hoditi* という動詞を用いて表していると考えられる。

一方、次の例では着点の表示を伴う定方向の移動が表される:

Hodao je u smjeru prvog odvojka(G) kuda je utrčao Jakov
(Baribier, *Trojanski konj*)

彼はヤコヴが駆け込んだ 最初の分岐路の方へと歩いた。

Dva Makedonca su 13 dana hodali do Beograda(G) da bi odali počast Titu.
(*Nezavisne novine*, 05.05.2005)

二人のマケドニア人はティトーに敬意を捧げるため、ベオグラードまで13日間歩いた。

1.5.6. 以上から *ići, hoditi/hodati* に関しては次のようにまとめられる: *ići* は移動を、始動、活動、達成の各局面において表すことができる。その意味で *ići* は定方向の移動を表すといえるが、しかしその意味は語彙に含意されるわけではなく、移動の各局面に対応する IT の部分の表示や、所与の文脈などによって与えられるものである。したがって不定方向の移動を表す状況についても、特別な制約なしに用いられる。*hoditi, hodati* もまた定方向、不定方向の移動を表すことが可能だが、かならず徒歩での移動

の意味を表す。したがって徒歩での移動の場合に *ići* と *hoditi*, *hodati* は競合することになり、ここにおいて *hoditi*, *hodati* は「歩く」という様態動詞として *ići* と示差的な関係になる。言いかたを変えれば, *ići*, *hoditi*/*hodati* がどちらも使用可能な状況で *hoditi*/*hodati* が選択されるならそれは「歩いて (移動する)」という様態の表出が優先されているということであり、このとき方向性に関する情報は非関与的あるいは余剰なものとなる。徒歩でかつ不定方向の移動の場合にこの意味は最も明瞭になり、もともと「歩き回る」という意味を持つ *hodati* が、汎用である *ići* に優先して使用される (*hoda po kući* 家中を歩き回る/(?) *ide po kući*¹⁸)。一方、同じく歩行移動の状況で *ići* が用いられれば、様態 (徒歩かそれ以外が) は非関与的であり、移動事象そのものあるいは移動の方向がより関与的であるという標識となる。つまり、これらの動詞の意味的競合関係は<表 5>のようにまとめられることになる:

<表 5> *ići*, *hoditi*, *hodati* の意味関係

| | +IT | -IT |
|-----|--|--|
| +徒歩 | <i>ići</i> / <i>hoditi</i> , <i>hodati</i> | <i>hodati</i> , <i>hoditi</i> (<i>ići</i>) |
| -徒歩 | <i>ići</i> | <i>ići</i> |

1.6. チャ方言における GREŠTI, ITI, HODITI

前述したように、SBC では GREŠTI は排除され、HODITI に対し *hodati* という、同語根から派生した動詞が競合する状況が生じている。一方、現代のチャ方言では GREŠTI は日常的に使用されており *hodati* は用いられない。つまり OCS 以来の GREŠTI, ITI, HODITI の 3 つの動詞の競合という体系が少なくとも語彙項目的には成立していることになる。この節では、チャ方言の状況について、これまでの記述研究の明らかにしているところと、現在のチャ方言で書かれたテキストの用例から明らかにして行く。

1.6.1. ČDL はダルマチア北部の Brač, Hvar, Vis の 3 つの島の方言調査をまとめた辞書である。この 3 つの島は 17 世紀に内陸部からシト方言話者が一部の地域に移り住んだほかは 16 世紀以来人口の大きな移動もなく、古いチャ方言がそのまま現代まで保持されてきた地域とされる。この辞書では *gresti* の現在形 (*gren*, *greš*, *gredu*¹⁹) は「*hoditi* の現在形」と記述され、*hoditi* の項目では完了 1- 分詞に *iša*, *išla* と *hodi*,

¹⁸ただし *ići po kući* と言えない訳ではない: *Majka je uvečer teškom išla po kući* [*Most*, 128-129].

¹⁹辞書に記されているアクセント記号は省略。なお、一人称単数形が *gren*[grē] のように両唇性のない鼻音でおわる形になるのはチャ方言の特徴である。

hodil 形の 2 通りが記載されている。また命令形は hol, hom/holmo, hote/holte である。ITI に該当する語彙 (不定詞, id-形の現在時制など) は掲載されていない。つまりこの辞書が採用した地域のチャ方言では 3 つの動詞が一つの範列を形成することになる:

<表 6> ČDL による ITI, GREŠTI, HODITI の範列関係

| INF | PRES. | I-PP. | IMPR. |
|--------|-----------------------------------|--------------------------------------|--------------------------|
| hoditi | gren, greš, gredu (< GREŠTI) | iša, išla (< ITI) hodil, hodila | hol, homo hote, holte |

Belič (1909:239) では, grešti-greden (PRES.1SG.) について “donesti-donesen, plest-pletjen のタイプの動詞に所属するが短縮形の gren, greš のみで使用される”と述べている。Hraste, Hamm, Guberina(1956:160) では grien, griedu を idem, idu の意味として掲載している。hoditi, iti に関しては記載がない。また Moguš (2002) では GREŠTI には不定詞はなく, 現在形が gren, greš の形で用いられ, 範列を埋めるのは不定詞 ić (= ići), 完了分詞 išal, išla であるとされる。そして hodi(= hoditi) では命令形のみ (odi, odimo) が用いられる。すなわち Moguš の記述では次の<表 7>のような範列になる:

<表 7>

| INF | PRES. | I-PP. | IMPR. |
|-----|-------------------|------------|----------------|
| ić | gren, greš, gredu | išal, išla | odi (< hodi) |

上記の ČDL の記述と比べると不定詞の部分で hoditi と ić が入れ替わったパターンを示している。

Kalsbeek(450) では gre-系列の現在形 (gren, greš, gre, gremo, grete, gredo) が示され, 人の移動のほか, 物事の進行, 事物の状態変化など (mljeko gre van ミルクが吹きこぼれている; sve gre va korist すべてが役に立つ) を表す例が挙げられている。また hoditi も “go, walk” の意味で hodin, hodiš, hodi, hode のように現在形で用いられ, 命令形は homo, hote, 完了 I-分詞形は hodil, hodilo となる (kad je hodi otac 父が来るときは)。Lukežić (140) は 1876 年に Bakar 出身の Mikuličić が書き残したテキストの中から命令形 homo(1PL.), hote(2PL.) を挙げている。また Houtzagers(252) では hodi(= hoditi) に現在形 hodim hodiš, 完了分詞 hodil, 命令形. hom, hot, hote, homo を示し, hoditi が「行く」の意味で用いられていることを示している。

1.6.2. 書かれたチャ方言テキスト。

ダルマチアの都市 (リエカ, スプリトなど) で発行されている紙メディア (Feral Tribune, Novi List, Glas Istre など) はしばしばチャ方言で書かれた記事を掲載している。これらは書かれた言葉でしかも新聞紙上というレジスターであることから, そこに現れる方言は“規格化”された, “チャ方言文章語”のようなものであるといえる。しかし SBC とは異なるチャ方言の共時的状態を反映する資料とみなすことができる。特にリエカの Novi List 誌²⁰は, 地元の“チャ方言作家”のコラムをはじめ常時豊富な方言記事を提供している。この日刊紙のチャ方言記事を同じ紙面の標準クロアチア語で書かれた記事と比較すると, *ići* の現在形である *ide*-形の出現は標準語で書かれた記事においてもっばら見られ, 方言記事では GRESTI の現在形が使用されている。一方過去形 (完了 I-分詞) では標準語記事でも方言記事でも ITI の I-分詞形が用いられるが, 方言記事での形態は標準語と異なり *šal, šla, šlo* である。したがってこの新聞の方言記事では不定詞 ITI~現在形 GRESTI(*gren, greš*) ~過去形 ITI(*šal, šla, šlo*) という形でこれらの動詞が補完的に用いられており, 上記の記述研究の中では Moguš による Senj 方言の場合と同じタイプを示しているといえる。

以下に Novi List 紙の記事からの用例をいくつか示す。

・ GRESTI

ići の現在時制として使用される。次の例は<過程> (PRC) を表す場合である:

ki kilometar gredu prebrzo, a onda je vrag zel šalu i spraznil takujin.

1 キロでも速度超過して 行く 人は, まじめな話, (高額の罰金で) カラッ欠にされてしまう。

これは 1.3.1 の最初の例と同じように, 起点も着点も示されない用法だが, 文脈を参照すると, 交通違反の罰金についてのエッセイの一節で運転手が車を運転する状況について語られていることがわかる。したがって *gredu* が表すのは<過程>である。同時にまた, GRESTI が徒歩に限らず乗車などの手段による移動にも用いられることも示している。

次は着点の表示によって<達成>の意味が明示される場合である:

kad greš na skijanje(G) ćutiš se kot nekakov težačina al tovarni konjina.

²⁰<http://www.novolist.hr/>

スキーに行くときは、まるでどこかの荷役か荷馬になった気分になるでしょう。

次の例では IT の起点と着点が表され全体として＜達成＞が表される：

Z velikoga grada Zagreba(S) još vavik greste va drugi veli grad.(G)
 大都会であるザグレブから またしても別の 大きな町に行かれる わけですが。

gre-形は SBC の *ići* と同じように往復移動を表すこともできる：

a posebe onisten ki gredu prvi put va školu rada bin poželet čuda lepega
 i dobrega...

特に初めて 学校にあがる こどもたちに、すばらしいことがたくさんあるようお祈りしますよ。

この例では *prvi put* 「初めて」という副詞があるが、これは「学校に行く (=通う) のが初めて」という意味であり、反復移動の開始をあらわす副詞と解釈される。

・ITI

ITI は GREŠTI と補完的に分布し、過去時制で用いられる：

I tako j' papa šal tamo kamo gredu si kad umru
 それでパパも人が死に近づくときに行くところに 行った んだ。
 1938. leta šli su va Sarajevo.
 1938 年にかれらはサラエヴォに 行った (=引っ越した)。

・HODITI

1.2. ですでに明らかにしたように、SBC において HODITI はかなり使用頻度の低い語彙である。事実、現代 SBC のさまざまなテキストの中で、あるいは SBC 話者の標準語を聞いていて、HODITI に出会うことはそう多くない。一方、チャ方言テキストを読んでいると、シト方言テキストの場合より HODITI に出会うことが多いという印象を受ける。そこでチャ方言の HODITI の使用頻度に関してある程度の感触を得るために、Novi List 誌のサイトから検索を試みた。I-完了分詞のすべての形を検索対象をとした結果 HODITI の I-分詞形は 27 例 (標準語記事の例は含まれない)、また同じ検索範囲で ITI の I-分詞 (チャ方言形の *šal, šla, šlo, šli, šle*) は 107 例であった。この比率はおおよそ 1:0.25、すなわち 4 対 1 で、シト方言における HODITI の使用比率に比べはるかに高く、先に見た SL あるいはロシア語などの数値と近い。このことを先の記述研

究の内容と照らし合わせると、チャ方言では HODITI は十分活力のある語彙であることが予想される。このことを念頭に HODITI の用例を見て行く：

まず、次のように移動場所 (L) が表される場合には、動態的狀態の意味が明確になる：

šjor Predrag Raos, poznati hrvacki književnik, hodil je po zagrebačkon Dolcu(L)
i z krojačkin metron meril banane.

著名な文学者であるプレドラグ・ラヨス氏は ザグレブのドラッツを歩き回り、服飾職人のメジャーでバナナの大きさを測った。

ここでは前置詞句 po Dolcu 「ドラッツ中を」によって方向性を持たない移動の範囲が明示され、全体として IT のない動態的狀態の表現となる。

次の例には 1- 分詞による過去形と現在 1 人称複数 hodimo が含まれ、どちらの形も「学校に通う」の意味を表す：

Hodil san va treći al četrti razred(G) osnovne kad je naš učitel I.L. doznal da moj kujin i ja po skriveć hodimo na vjeronauk(G).

私が小学校 3 年か 4 年のクラスに通っていた頃、私と従兄弟がこっそり 神学校に通っている ことに担任の I.L. 先生が気がつきましてね。

実際の用例においては、HODITI は往復移動や不定方向への移動に用いられる場合が大部分である²¹。しかし次の例のように定方向への移動と解釈される例もある：

Hodila je za njin se va dubje

彼女は彼の後についてますます (川の) 深いところへと 歩いて行った。

ここは移動者 (女性) が男友達に手を引かれて川の中に入って行く話の一節で、不定方向の移動とは言いがたい状況である。用例からみる範囲で Novi List 紙のチャ方言の hoditi はシト方言の hoditi より是不定方向の移動の意味をより積極的に表すように見えるが、同時に SBC の hoditi と同じように、ITI/GRESTI と競合する状況で用いられればそれはまず「徒歩」という様態動詞としてであり、このとき方向性の有無という特徴は非関与的になるということになる。

1.6.3. 現代チャ方言と SBC, まとめ。

²¹ チャ方言話者の語感でも「通う」などの場合に主に用いるという (私信)。ただし命令形 “(h)odi!” は「(こちらに) 来い！」のように用いられ、“定” “不定” という使いわけの意識は希薄であるように見うけられる。

チャ方言とシト方言 (SBC) を共時的に比較すると、語彙項目の分布としてチャ方言は OCS 以来の伝統である GREŠTI, ITI, HODITI の 3 動詞が競合する体系を保ち、書かれたチャ方言テキストでは GREŠTI は ITI の現在時制の形態として ide-形に代わって使用される。これに対してシト方言では GREŠTI は失われ、代わって新たに発生した hodati という動詞が加わって ITI, hoditi/hodati という体系が成立している。しかしどちらの言語でも移動の方向性を語彙意味に含意するような動詞はなく、ITI/GREŠTI が移動全般について用いることのできる汎用動詞であるのに対して、HODITI/hodati は「歩行」という様態を表示する有標の動詞として用いられるということになる。

2 通時態。

2.0. 問題点。

1 章で明らかにした分布を通時的観点から見ると、(1) 古い南スラヴ語で GREŠTI, ITI, HODITI が表していた移動はどのようなものであったのか、(2) シト方言、カイ方言ではどのようなプロセスで GREŠTI が消失し、また HODITI の使用が狭まって行ったのか、といったことが問題として浮上してくる。またこれらをさらに発展させれば、接頭辞による動詞派生の体系の中でこれらの動詞がどのような価値を持っていたかという重要な課題がある。たとえば、Meillet が指摘したように²²、スラヴ語ではほとんどの非派生動詞に接頭辞を付加して派生動詞が形成されるのに、なぜ GREŠTI にはそのような接頭辞付き派生動詞がないのか。また ITI, HODITI などの移動動詞は接頭辞を付加することでスラヴ語固有の体の体系に組み込まれるが、現代の SBC では ITI に接頭辞を付加した派生動詞 otići, doći, sići などに対して体のペアを組むのは、もともと不定動詞として組になるはずの HODITI から派生した othoditi, dohoditi などではなく、laziti「這う」から派生した odlaziti, dolaziti, silaziti などである。どのような変遷を経てこうした体系に至ったのか²³。そうした問題への取り組みの端緒として、本稿ではまず (1) の問題に焦点をあて、古チャ方言においてこれらの語彙がどのように用いられていたかを文献の用例から検討し、現代チャ方言との連続性と違いを明らかにする。

²² 注 1 を参照。

²³ Svane (144) は hoditi から接頭辞付加によって ITI と対になる不完了体動詞が派生される仕組みはチャ方言および一部のシト方言では今日も有効だが大部分のシト方言でこの造語法は新たに生じた laziti からの派生に置き換えられたとし、14 世紀にはすでにこの派生パターンが優勢になっていたと指摘している。

2.1. 辞書類。

チャ方言の最も古い活字印刷された「辞書」である Faust Vrančić の『五言語辞典 *Dictionarium quinque nobilissimarum Europae linguarum*』(1595) では *gredem* (GRESTI の現在 1 人称単数) はラテン語 *eo*, イタリア語 *vado*, ドイツ語 *gein*(*gehen*), ハンガリー語 *meegyeek* (*megyek*) に対応する語として挙げられ, また ITI は不定詞 *iti* が *perfugere*, *andare*, *hingehn*, *menten/menni* と, また HODITI は不定詞 *hoditi* が *ambulare*, *caminare*(*camminare*), *gehn*, *yarny*(*jarni*) と対応して挙げられている。他の動詞が不定詞形で示されているのに対して GRESTI が 1 人称現在形で挙げられていることは, この動詞がもっぱら現在形で用いられたか, あるいは少なくとも著者がそう考えていたことを推測させるが, これは OCS の伝統から現在のチャ方言に至るまでの GRESTI の用法の実際と合致するといえるだろう。この点を除くと GRESTI と ITI は「行く」の意味でほぼ同義である。ただしラテン語やドイツ語の対応からは ITI に「出かける, 去る」の意味を与えていたとも考えられる。また HODITI は *camminare*, *jarni* などの対訳と対応していることから「歩く」という意味を与えていたことも推測される。

Vrančić とほぼ同時代人で, チャ方言使用地域であるパーグの出身でありながらシト方言を文章語のモデルとして志向した Bartol Kašić の『クロアチア-イタリア語辞書 *Razlika Skladnja Slovinska (Hrvatsko/talijanski rječnik)*』(1599) でも GRESTI は 1 人称単数 *gredem*, *grem* で掲載され, イタリア語の対訳は *vengo* 「来る」である。また ITI は同じく 1 人称単数 *idem* で挙げられ, 対訳は *vado* 「行く」となっている。*vengo*, *vado* をそれぞれ訳語として *grem*, *idem* にあてた意図がどのようなものであったのか, 言い換えれば, 「行く」と「来る」のような視点による反意語の区別を持たないこの言語において, Kašić が *grem*, *idem* の違いを語彙的意味の違いとしてとらえていたかどうかについては, さらに彼のその他の著作を検討しなければならない。HODITI は項目に採用されていない。

2.2. グルシコヴィッチ断片 (*Grškovićev odlomak djela Apostola (GA)*)

OCS の伝統を継承し, 若干のチャ方言要素を含むクロアチア教会スラヴ語最古のグラゴール文献とされる『グルシコヴィッチ使徒行実断片』²⁴では GRESTI, ITI はそれぞれ次のように用いられている:

²⁴ この文献についての詳細は三谷 (2001) を参照。用例出典は Jagić (1893) による。[] 内は使徒行実の箇所。

・ GREŠTI

- (1) da gredušču petru ponê stên' osênit' etera:ih' [5.15]

APP.dat. dat.

ペテロが 歩いて行く ときにその影がかれらの誰かにあたるようにと

- (2) a muži gredušči s'nim' stoêhu divešče se [9.7]

PL.nom APP.PL.nom.

彼とともに 歩んでいた 男たちは驚いて立っていた。

(1)(2) ともに能動現在分詞形で、前者は絶対与格構文中の用法、後者は連体修飾形である。どちらも徒歩での移動であることは明かだが、所与の文だけでは移動の定方向性については何も積極的には示されず、D-STATE とも PRC とも解釈可能である。しかしそれぞれの文脈を見ると、(1) は「ペテロが通るときにその影にふれるようにと、病の人々を通りに運び出した」という状況であり、(2) はサウルがダマスカスへ向かう途中に神が顕れる場面である。つまりどちらも、移動者が不定方向に進んでいたという解釈を排除する状況であり、GA にみられる GREŠTI は定方向の移動を表しているということになる。

・ ITI

用例は 3 例で、うち 1 例が未完了過去 3 人称単数形、残り 2 例は命令形である：

- (3) î ne vidê ga k tomu kaženik: idêže v' put' svoi radue se [8.39]

IMPF.3SG. PREP acc.

そして宦官は彼をその後見ることはなく、喜びつつ道を 進んで 行った。

- (4) n' v'stav' idi v' grad' [9.6]

IMPR PREP acc.

立って、町へ 行きなさい。

- (5) reče k nemu g(ospod)' idi: êko s'sud' izbran'i mi est' [9.15]

IMPR.

主は彼に仰せになった、行きなさい、彼は私に選ばれた器なのです。

(3) はピリポが宦官に洗礼を授け、その後宦官が(馬車に乗って)旅を続けたという場面 [8.39] である²⁵。したがってここでの iti は“徒歩で”の移動ではない。また事象

²⁵ギリシャ語 ἐπορεύετο(IMPF.3SG. to travel, go) に対応する。

タイプとしては「先へ進んだ, 行った」という〈始動〉の意味で用いられていると解釈できる。(4)(5) は命令形で, 前者は着点を明示した〈達成〉, 後者は〈始動〉, どちらも定方向の移動を表している。

2.3. ヴァチカンのクロアチア 祈祷書 (Vatikanski hrvatski molitvenik(VHM))

チャ方言で書かれた教会文献から『ヴァチカンのクロアチア祈祷書 (VHM)』を取り上げる。VHM は 1400 年頃にドゥブロヴニク付近で作られたとされる祈祷書で, チャ方言で書かれた祈祷書 (molitvenik) としては現存する最古のものである²⁶。テキストならびにデータは Fancev (1934), König(1972) による。

この文献での GRESTI, ITI, HODITI の全用例は〈表 8〉のとおりである:

〈表 8〉 VHM の GRESTI, ITI, HODITI

| | INF | PRES | PRAES. | I-PP | IMPR | APP |
|--------|--------|--|--|------|------------|---|
| gresti | | gredu(1SG.) gede(3SG.) | | | | greduće(M.PL.) gredući(M.SG.) gredućega (MSG.acc.2x) |
| iti | | ide(3SG.) idemo(1PL.2x) | | | | |
| hoditi | hoditi | hodju(1SG.2x) hodić(2SG.) hode(3PL.) | hodih(AOR.1SG.) hodjahu(IMP.F.3PL.) | | (hodi)(2x) | |

一覧表から明らかなように GRESTI, ITI は分詞を除くと, 現在時制のみで使用され, HODITI は分詞を除くすべての形式で用いられている。以下に該当の語形を含む箇所を挙げる。

・ GRESTI

現在形が 2 例, 現在分詞 (限定辞) が 3 タイプ計 4 例ある。現在形は下の (1)(2) で

²⁶ 現在ヴァチカン図書館に保存されているためにこの通称で呼ばれ, より古い時代の翻訳テキスト (複数) の写しであると考えられるが, その翻訳には古い教会スラヴ語の痕跡が見られることからラテン語から直接翻訳されたものではなく, さらに古い時代の教会スラヴ語訳からの写しであると見られている。ラテン文字で記されているが, グラゴール文字およびキリル文字の筆致を伺わせる特徴が見られる。言語は土着のチャ方言の特徴を強く示し*ǣ の反映形は主に i であるが ije となる場合も混在している。(König 5-13; Fancev VIIIff.; Hercigonja 163, 165)

ある:

- (1) i tada rekoh ovo : gredu. (Psalms, 40-8)(Fancev: 59-16)

そのとき私は言った:私は行く, と。

- (2) sva koja da meni otac k meni(G) grede (Fancev: 50-17)²⁷

父が私に下さるすべてのものが 私の方にやってくる。

・ ITI

現在形 2 タイプ, 3 人称単数形と 1 人称複数形が用いられている:

- (3) pravda prid njim ide (Psalms, 84-14) (Fancev: 19-12)

真実は彼の前を 行き

- (4) Ovi gospod ide i svi sveti njegovi s nim. (Fancev: 31-16)

主は お行きになり, 彼の聖人たちもみな彼とともに行かれる。

- (5) v dom gospodanj(G) idemo (Psalms, 121-1)(Fancev: 21-7, 26-5)

主の御家に行こう。

・ HODITI

唯一の不定詞は imam の補語として用いられている:

- (6) daj nam poznati put počom(P) imam hoditi (Psalms, 142-8)(Fancev: 41-17)

われらに 歩いて行くべき道をお示してください。

HODITI の現在形は 3 タイプ 4 例, (7)(8) は 1 人称単数, (9) は 2 人称単数, (10) は 3 人称複数である:

- (7) i priklonjen vasdan hoju s žalostan (Psalms, 37-7)(Fancev: 37-18)

身を屈め一日中嘆きながら さまよっています。

- (8) Iere ako hoju posried sieni smartne(LOC) ne boju se zla. (Psalms, 22-4) (Fancev: 55-24)

たとえ死の影のただ中を行こうとも悪を恐れはしません。

- (9) naučiti hoću tebe na put ovim kim(P) hodiš (Psalm, 31-8)(Fancev: 37-4)

あなたに行くべき道を教えてあげよう。

²⁷Fancev に対応のラテン語として omne quid dat mihi pater ad me *veniet*. とある。

(10) Blaženi svaki boieći se gospoda koi hode puti njegovim(P)

(Psalms, 127-1) (Fancev: 24-12)

主を恐れ彼の道を行くものは幸いなる者たちである

単純過去形は 2 例, 1 人称単数アオリストと 3 人称複数未完了過去である:

(11) Ni hodih u velicieh ni udivnnih svarhu mene(Psalms, 130-1)(Fancev: 29-19)

私を超える大きなもの, 驚くべきものに私は 加わり ませんでした。

(12) i pod iamstvom hojahu svaki dan (Psalms, 37-13) (Fancev: 38-2)

(かれらは) 脅しとともに 毎日やってきて

また命令形と思われる形 hodi が 2 度続けて用いられているが, 該当する詩編の箇所 (Psalms, 39-16)(Fancev: 60-1) では「すばらしい! すばらしい!」という呼び声にあたるので, ここでは考察対象からはずす。

以上の用例をまとめ, 文の意味ならびに IT の部分の表示の有無から移動の方向性について判断したのが次の<表 9>である:

<表 9>

| | GRESTI | | | HODITI | |
|-----|--------|---------|------|--------|---------|
| (1) | gredu | INGR | (6) | hoditi | (+P) |
| (2) | grede | PRC(+G) | (7) | hoju | -IT |
| | ITI | | (8) | hoju | PRC(+P) |
| (3) | ide | PRC | (9) | hodiš | PRC(+P) |
| (4) | ide | (INGR) | (10) | hode | PRC(+P) |
| (5) | idemo | ACC+G) | (11) | hodih | -IT |
| | | | (12) | hojahu | -IT |

GRESTI, ITI はすべての場合において定方向の移動と解釈できる。一方 HODITI の 7 例のうち 4 例は「道を行く」の意味であり<過程>と解釈可能だが, (7) の hoju は動態の状態を表すものである。また (11) は文字通りの移動というよりは「後を追う」「仲間に加わる」の意味で, 後を追う対象が複数であることから定方向の移動ではないと解釈した。(12) は過去の移動反復であり, このテキストで ITI が +IT の意味を表すと考えたとその体系的対立から HODITI を用いた反復は非終結性の動態の状態のタイプと考えるのが妥当と思われる。このようにまとめると, VHM では GRESTI, ITI は

明示的に、あるいは文脈上理解できる形で定方向の移動を表し、HODITI は不定方向の移動、あるいは＜過程＞の意味として解釈可能な移動を表すということになる。

2.4. イストラ境界区分 (Istarski razvod[IR])

『イストラ 境界区分』はテキストに 1315 年という年が記載されたグラゴール文字による実用文書で、16 世紀の写本が残されている。若干の教会スラヴ語要素の混入が見られるものの、14-16 世紀頃のイストラ半島中南部のチャ方言で書かれていると考えられる²⁸。テキストは Bratulić(1992) による。このテキストでは問題の 3 つの動詞は＜表 10＞のように使用されている：

＜表 10＞ IR における GRESTITI, ITI, HODITI

| | INF | PRES | PRAES | I-PP | IMPR. | APP |
|----------|-----|---------------------------------|----------------------------------|---------------|-------|---------|
| GRESTITI | | gredehu(3PL.) gredu(3PL. 2x) | gre(3SG.10x) | | | gredući |
| ITI | | | ide(3SG. 2x) idoše (3PL.101x) | | | |
| HODITI | | | | hodili(M.PL.) | | |

どの動詞も不定詞の用例はなく、現在形と能動現在分詞は GRESTITI のみ、また完了 I-分詞は HODITI のみで、GRESTITI, ITI は単純過去時制で競合する。

・GRESTITI

現在形は 3 人称単数 gre と複数 gredu のみ、そのうち単数形の gre10 例のうち 9 例が「道」を主語として「道が続く」の意味、1 例は「罰金が領主の側に渡る」の意味で、人の移動を表す用法はない。3 人称複数 gredu は「人々が来る (ように)」という移動を表している：

- (1) I g(ospo)d(i)n markez zapovida komunu z Oprtlia da zberu 3 muža s nîm
po razvodeh da gredu

伯爵様は オプルタリのコムーンに、男を 3 名選びかれらが境界区分に一緒に 来る
ようにと命じられた。

単純過去形の gredehu (3PL.) では IT の部分を明示する要素はないが「先へと進み」

²⁸Istarski razvod の詳細については三谷 (2003) を参照。

という表現から定方向の移動であると解釈できる:

- (2) sudac Valtar i Karlan i Žulijan i Brnardo gredehu napred
 判事のヴァルター、カルラン、ジュリアン、ブルナルドが先へ進み

・ITI

ITI はアオリスト 3 人称単数 ide と複数 idoše が用いられている。ide は 2 例でどちらも着点をめざす移動である:

- (3) I tako komun bulàski ide veselo domov (G)
 かくしてプーラのコムーンは喜んで 家路についた。
 (4) a g(ospo)d(i)n markez ide(…) k večeri v Labin(G)
 伯爵様は (…)夕方になって ラビンへ行かれた。

最も用例の多いのは idoše で 101 例あり、いずれも定方向性を示す要素である起点、経路、着点のいずれかあるいはそれらの組み合わせとともに用いられている:

①起点を表示した始動

- (5) Od tu(S) idoše naprid starci i behu zbrani od vseh teh komuni
そこから 古老たち、またこれらのコムーンから選ばれた人々が先へ進んだ。

②経路を示した過程

- (6) I tako vsa gospoda idoše po stareh zlamenîah(P) kako se v listu udържаše.
 かくして領主様方は文書で示されているように 古い標識にそって進まれた。

実際には経路のみが示される上のような例は少なく、多くの場合着点がある後に並列的に示される:

- (7) I tako ravno idoše po stareh zlamenîah(P), i pridóše v Dragu slivsku(G)
 かくしてまっすぐ 古い標識にそって進まれ、スリヴァのドラガに到着された。

③着点を示した達成

- (8) I tako vsi ti komuni idoše veselo domov (G)
 かくしてこれらのコムーンの人々はみな、喜んで家路についた。
 (9) A g(ospo)d(i)n knez i gospoda i zlatom pasnici 8, vsaki nîih z dvanajste slugami na konîih, a z 12 pešeh, i deželani idoše v Pazin(G).

公と 8 名の金帯の領主様方、それぞれ 12 名の騎馬従者と 12 名の徒歩従者、そして土地の者たちは バジンに行かれた。

④起点と着点を含む到達

(10) Od tu(S) idoše na malin mrčeneški(G).

そこからムルチェネツの水車へ行かれた。

⑤経路と着点を含む到達

(11) I tako ravno idoše po zlamenčah(P) na Zmišjev dol(G).

かくしてまっすぐ 標識にそってズミヤドールへ行かれた。

⑥起点、経路、着点を含む到達

(12) Od tu(S) idoše po stareh zlamenčah(P) ravno na mnel veliki(G), i tu najdoše križem čavli zabiene

そこから古い標識にそって まっすぐ 大きな水車へ と 進み、そこで十字型に打ち込まれた鉄を見つけた。

・HODITI

IR では一例のみ、完了 1-分詞形が用いられている:

(13) i rekoše da iesu nñh stareñ tu, na te termini veće krat hodili

そして確かにかれらの親たちもおり「その境界へ幾度も 行った」と語った。

古チャ方言における完了形の使用には話法の問題が関係していると考えられる²⁹が、ここで HODITI が使用されていることを veće krat 「幾度も」という副詞との共起と関連づけて考えれば、このテキストにおいては ITI, GREŠTI が一定方向への進行を表し、HODITI は往復あるいは多回的な移動を表すという使い分けがあったという可能性も考えられる。

2.5. トウンダイルの幻視 (Dundolovo vidjenje[DV])

『トウンダイルの幻視』は中世キリスト教ヨーロッパ世界に流布した『幻視もの』の一つである。クロアチア、チャ方言のテキストは 14~15 世紀に翻訳テキストとして成立したと考えられ、グラゴール文字で書かれた『ペトリス選集 Petrisov zbornik』に含

²⁹これについては三谷 (2003a) で論じた。

まれている。本稿のテキストはŠtefanić (200-220) による。このテキストで用いられている三つの動詞の時制形の分布は次の<表 11>のとおりである:

<表 11> DV における GREŠTI, ITI, HODITI

| | PRES. | PRAES. | 1-PP. |
|--------|----------------------------|---|-------|
| GREŠTI | grem (1SG.) greš (2SG.) | gredehu(3PL.) gredeše (3SG.) gredeše (3SG.) | |
| ITI | ideva(1DU.) | idehota (3DU.2x) ideše(3SG.) idehu(3PL.) | |
| HODITI | | hojaše(3SG.) hodista(3DU.) | hodil |

ここでも IR と同じように、完了 1-分詞では HODITI のみを使用され、GREŠTI, ITI は現在時制ならびに過去時制で用いられている。能動分詞では gresti, hoditi, iti は競合している。

・ GREŠTI

現在形は以下に示すように 1 人称単数 (1) と 2 人称単数 (2) が 1 例ずつである:

- (1) ovo jure grem k vratom(G) vëčne smrti.

これはもはや 永久の死の扉に私は向かっているのだ。

- (2) zač sada ne greš na preljubodëstvo(G)

今はなぜ、不貞の道に赴かないのか。

過去形は 3 例だが、そのうち grediše, gredeše は「炎が出ていた」という状況を表すのに用いられ、人の移動は次の 1 例のみである:

- (3) onih duš ke gredëhu po tom vuskom mostu(P)

その 狭い橋を通って行く者たちを

・ ITI

現在形は 1 人称双数が 1 例「どこへ」と着点を尋ねる疑問文で用いられている:

- (4) Kamo(G) jure ideva, o moj slatki gospodine?

私たちは どこへ行く のですが、わが愛しきご主人様？

過去形では、ideše(未完了過去3人称単数) 3例のうち2例は grediše と同じく「炎」「煙」が出ていた状況を表し、1例が次の(5)で hoditi の未完了過去双数形と等位的に用いられる:

- (5) aniël naprid ideše i hodista mnogo vrême po tom zalom i tamnom puti
 天使が先を 行き 二人はその長い邪悪の暗い道を歩いて行った。

3人称双数の idehota は po+前置格、複数 idêhoda は prek+G という空間の表現とともに用いられる:

- (6) kada idêhota po tamnicah i po velikoj suhotê(P)
 かれら二人が暗闇と大いなる旱魃のただ中を行くと
 (7) duše one ke prêk te gore(P) idêhu.
 その 山を越えて行く 者たちの魂を

・ HODITI

過去時制は2例で、1例は上記の(5)にある ideše の後続部分に用いられている。もう一つの例は3人称単数未完了過去形で用いられる:

- (8) paki oholo v zlatê i v srebrê hojaše
 傲慢に金銀を身につけて暮らしていた。

HODITI は IR と同じくここで1例のみ1-完了形で用いられている:

- (9) ja jesam vazda poli tebe hodil i kamo si se koli ti obrnul
 私はいつもあなたがどこに 赴こう とあなたの傍らを歩いていた。

能動分詞は男性単数主格形の用例がある:

- (10) zač sada ne greš na preljudôdêjstvo i ne ljubodêječ hodeći v tvojej velikoj gizdê?
 なぜ今は不義の道を行こうとはせずおまえのき きらびやかな宝石を まとって 不義を働かないのか。

以上をまとめると(1)(7)の GREŠTI, ITI の例はいずれも IT の部分の表示を伴った定方向への移動を表していると解釈できる。(5)の naprid ideše は、これだけでは

IT を含む移動かどうか不明瞭だが、後続する文脈によって定方向への移動であることが明らかにされる。また (6) もこの文単独では方向を特定しない移動という解釈が排除されないが、ここは天使に導かれて主人公があゝの世を旅するという物語の内容に参照することで、動態的状态ではなく＜過程＞であるという解釈が優先される。これに対して HODITI の (8)(10) は先の VHM の (7) と同じように文字通りの空間的移動というよりは移動者の状態(ここでは金銀を身につけて暮らす)を表しており、動態的状态の表現と見ることができる。また完了形の *hodil* は移動そのものを焦点化し、方向性については何も表明していないが、「あなたがどこへ赴こうとも」という表現と共起していることから不定方向の意味と解釈できる。したがって DV における GRESTI, ITI, HODITI の時制形の意味特性をまとめると下の＜表 12＞のようになり、ここでも GRESTI, ITI においては基本的に IT のどこかの部分を含む定方向の移動が意図されており、HODITI においては文脈から解釈できる定方向の移動を表す場合もあるが、不定方向の移動を表す場合に用いられるという傾向を見ることができる:

＜表 12＞ DV における GRESTI, ITI, HODITI の時制形の意味特性

| | GRESTI | | ITI | | HODITI | |
|--------|--------------------|--------|--------------------|--------|--------------------|--------|
| PRES. | (1) <i>grem</i> | ACC(G) | <i>ideva</i> | ACC(G) | | |
| | (2) <i>greš</i> | ACC(G) | | | | |
| PRAES. | | | (5) <i>ideše</i> | PRC | (8) <i>hojaše</i> | -IT |
| | (3) <i>gredehu</i> | PRC(P) | (7) <i>idehu</i> | PRC(P) | (5) <i>hodista</i> | PRC(P) |
| | | | (6) <i>idehota</i> | PRC(P) | | |
| I-PP. | | | | | (9) <i>hodil</i> | -IT |

2.6. 以上に検討した古チャ方言テキストから GRESTI, ITI, HODITI についてまとめると次のようなことが指摘できる:

(1) GRESTI, ITI は基本的に定方向の移動を表す状況で用いられる。HODITI は方向を定めない移動 (VHM(7)(11), DV((8)(10)) や反復移動 (VHM(12), IR(14)) をあらわすとともに、「徒歩で行く」「進む」のように移動の様態あるいは歩行移動という行為そのものに焦点がある場合に用いられる (VHM(8)(9)(10), DV(5))。

(2) 様態に関しては HODITI が「徒歩」であるのに対し、ITI は徒歩でない移動にも用いられる。これは GA(3) ですでに示されており、また IR(4) も、伯爵は騎馬でこの境

界区分に立ち会っていることが別の文脈で示されていることから「徒歩で」移動したとは考えがたい例である。GREŠTI は本稿で扱う文献の範囲では「徒歩」の用例しかないが、ITI のように歩行以外の様態での移動の可能性についても保留しておく必要があると考える。

(3)GREŠTI, ITI は現在形, 単純過去形, 分詞で使用されているが, 完了1-分詞の用例はない。これに対して HODITI は VHM に不定詞, IR, DV に完了形の用法がある。古チャ方言で書かれた中世文献の重要なテキストである『教父典 *Žiđa svetih otaca*』においてもやはり ITI, GREŠTI は現在形, 単純過去形, 分詞で使用され HODITI はこれらの形態のほか不定詞と1-完了分詞の用例がある。特に ITI, GREŠTI に完了分詞の用例が見られないことは興味深い。GREŠTI は Meillet から Maretić に至る考察に鑑みると, もともと1-分詞が存在しない語彙であった可能性が強く示唆されるが, ITI に用例がないことは, 1-分詞がなかったという理由に帰することはできないだろう。たまたまこれらのテキストで ITI の1-分詞の用例がなかったかもしれないが, そのこと自体がこの形態の使用頻度の低さを反映しているのかもしれない。使用頻度が低かったとすればそれは何に起因するのか, 動詞語彙意味と完了形の文法的意味の関係が問題なのか。これは今後の課題としなければならない。

3. おわりに。

本稿ではスラヴ語の移動動詞 GREŠTI, ITI, HODITI の南スラヴ語方言における共時的分布と通時的実態について記述的に考察した。チャ方言では古チャ方言の時代から現代に至るまでこの3つの動詞が一つの共時態に存在しているが, 古チャ方言では GREŠTI, ITI は同じ環境(現在時制, 単純過去時制)に出現しており, 現代チャ方言のように一つの動詞の範列を補完するような関係ではなかった。しかし, この二つの動詞の間に Meillet が指摘した“不定”と“定”の違いが根源的にあったとしても, 古チャ方言においてはそれは失われており, ほとんど同義になっていたと考えられる。そのためにやがて現代チャ方言のように一つの語彙の範列要素という形に収束して行ったのだろう。一方 HODITI は古チャ方言においては不定方向への移動の意味を表す傾向が見られ, その点で ITI/GREŠTI と対立があったと推測される。この対立は, 少なくとも書かれた現代チャ方言では若干残されているように見えるが, 方言によっては ITI, GREŠTI, HODITI が一つの範列を形成するようになっている場合もあり, 地域ごとに変遷が異なったことも示唆している。

参考文献:

- Bach, E. 1986. The Algebra of Events. *Linguistics and Philosophy*, 9, 5-16.
- Bajec, A. et al. 1994. *Slovar slovenskega knjižnega jezika*. Ljubljana: DZS.
- Barac-Grum, V. 1993. *Čakavsko-kajkavski govorni kontakt u Gorskom kotaru*. Rijeka: Izdavački centar Rijeka.
- Belić, A. 1909. Zamětki po čakavskim" govoram". *IOSJS*, XIV, 1/2.
- Bojanova, S., Ilieva, L. 2003. *B"lgarsko-anglijski rečnik*. Veliko T"rnovo: Gaberoff.
- Bratulić, J. (ed.) 1992. *Istarski razvod*. Pula: Libar od grozda.
- Broz, I., Iveković, F. 1901. *Rječnik hrvatskoga jezika*. Zagreb: Štamparija Karla Albrechta.
- ČDL : see Hraste, Šimunović, Olesch.
- Daničić, D. 1863-64. *Rječnik iz književnih starina srpskih*. Biograd: Državna štamparija. Reprint. 1975. Beograd: Vuk Karadžić.
- . 1874. *Istorija oblika srpskoga ili hrvatskoga jezika do svršetka XVII vijeka*. Biograd: Državna štamparija. Reprint. München: Otto Sagner. 1981.
- Dowty, D.R. 1991. Thematic Proto-Roles and Argument Selection. *Language*, 67, 547-619.
- Dimitrovski, T. et al. 1961-1966. *Rečnik na makedonskiot jazyk: sa srpskohrvatski tolkuvanja*. Reprint. 1994. Skopje: Kliment Ohridski.
- Fancev, F. 1934. *Vatikanski hrvatski molitvenik i dubrovački psaltir. Dva latinicom pisana spomenika hrvatske proze 14 i 15 vijeka*. Zagreb: JAZU.
- Filip, H. 1999. *Aspect, Eventuality Types and Nominal Reference*. New York & London: Garland Publ. Inc.
- Habdelić, J. 1670. *Dictionar ili réchi szlovenszke*. Reprint. 1989. Zagreb: Kršćanska sadašnjost.
- HER: 2002. *Hrvatski enciklopedijski rječnik*. Zagreb: Inter Liber.
- Hercigonja, E. 1975. *Povijest hrvatske književnosti*. knj.2. Zagreb: Liber.
- Houtzagers, H.P. 1985. *The Čakavian Dialect of Orlec on the Island of Cres*. Studies in Slavic and General Linguistics. vol.5. Amsterdam: RODOPI.
- Hraste, M., Hamm, J. Guberina, P. 1956. Govor Otoka Suska . *Hrvatski dijalektološki zbornik*. knj.1. Zagreb: JAZU.

- Hraste, M., Šimunović, R., Olesch, R. 1979. *Čakavisch-Deutsches Lexikon*. Köln-Wien: Böhlau Verlag.
- IR: see Bratulić, J.
- Ivšić, S. 1970. *Slavenska poredbena gramatika*. Zagreb: Školska knjiga.
- Jagić, V. 1893. *Grškovićev odlomak apostola*. *Starine* 26, 38-161. Zagreb: JAZU.
- Kalsbeek, J. 1998. *The Čakavian Dialect of Orbanic near Žminj in Istria*. Amsterdam: RODOPI.
- Karadžić, V. S. 1818. *Srpski rječnik istolkovan njemačkim i latinskim riječima*. Beč. Reprint. 1987. see Ivić.
- Krifka, M. 1992. Thematic Relations as Links between Nominal Reference and Temporal Constitution. Sag, I. A., & A. Szabolsci (eds.) *Lexical Matters*. Stanford : Centre for the Study of Language and Information. Lecture Notes 24, 29-53.
- Ivić, P. (ed.) 1987. *Dela Vuka Karadžića*, 3. Beograd: Prosveta-Nolit.
- Karadžić, V. S. 1935. *Srpski rječnik istumačen njemačkim i latinskijem riječima*. 4-o izdanje. Beogradu: Štamparija Kraljevine Jugoslavije.
- Kašić, B. 1595. *Hrvatsko-talijanski rječnik*. Manuscript. Reconstructed and edited. Hrvat, V. (ed.) 1990. Zagreb: Kršćanska sadašnjost.
- König, Đ. 1972. *Das Verbalssystem des vatikanski hrvatski Molitvenik*. Julius-Maximilians-Universität zu Würzburg. Dissertationsdruck.
- Lönngren, L. (ed.) 1993. *Chastotnyi slovar' sovremennogo russkogo iazyka*. Uppsala: Acta Univ. Ups.: Studia Slavica Upsaliensia.
- Lipljin, T. 2002. *Rječnik varaždinskoga kajkavskog govora*. Varaždin: Garestin.
- Lončarić, M. 1996. *Kajkavsko narječje*. Zagreb: Školska knjiga.
- Lukežić, I. 1996. *Trsatsko-bakarska i crikvenička čakavština*. Rijeka: Izdavački centar Rijeke.
- Maretić, T. 1931. *Gramatika i stilistika hrvatskoga ili srpskoga književnog jezika*. 2. izdanje. Zagreb: Obnova.
- Marica, D. 1997. *Žića svetih otaca*. Zagreb: Matica Hrvatska/Institut za hrvatski jezik.
- Meillet: Meié, A. 1951. *Obshche slavianskii iazyk*. Pervod s vtorogo francuzskogo

- izdaniia. M.: Izd-vo Inostrannoi literatury.
- Moguš, M. 2002. *Senjski rječnik*. Zagreb-Senj: HAZU/Matica hrvatska.
- Moguš, M., Bratanić, M., Tadić, M. 1999. *Hrvatski čestotni rječnik*. Zagreb: Školska knjiga.
- Popov, D. et al. 1994. *B"lgarski t"lkoven rečnik*. Četverto izdanje. Sofija: Izdatelstvo nauka i izkustvo.
- RSHKJ: Stevanović, M. et al.
- RSHKNJ:1959-. *Rečnik srpskohrvatskog književnog i narodnog jezika*. Beograd: SANU.
- Skok, P. 1971. *Etimologijski rječnik hrvatskoga ili srpskog jezika*. Zagreb: JAZU.
- SSKJ: see Bajec, A. et al.
- Stefanić, Vj. 1969. *Hrvatska književnost srednjega vijeka od XII do XVI. stoljeća*. Pet stoljeća hrvatske književnosti. knj.1. Zagreb: Matica hrvatska.
- Stevanović, M., Marković. S., Matić, Sv., Pešikan, M., et al. 1967. *Rečnik srpskohrvatskoga književnog jezika*. Novi Sad-Zagreb: Matica srpska/Matica hrvatska.
- Storjohann, P. 2003. *A Diachronic Contrastive Lexical Field Analysis of Verbs of Human Locomotion in German and English*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Svane, G. O. 1958. *Die Flexionen in štokavischen Texten aus dem Zeitraum 1350-1400*. København: Universitetsforlaget i Aarhus.
- Toporišić, J. 2000. *Slovenska slovnica*. 4-a izdaja. Maribor: Založba obzorja.
- Vasmer, M. 1986-87. *Etimologičeskii slovar' russkogo iazyka*. 1-4. 2-e izd. M.: Progres.
- Vendler, Z. 1967. Verbs and Times. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York: Cornell University Press. 97-121.
- Vrančić, F. 1595. *Dictionarium quinque nobilissimarum Europae linguarum: Latinae, Italicae, Germanicae, Dalmatiae & Ungaricae*. Venetiis. Reprint. 1992. Zagreb: Novi Liber.
- Vincenot, C. 1975. *Essai de grammaire slovène*. Ljubljana: Mladinska knjiga.
- Zasorina, L.N. 1977. *Častoty slovar' russkogo iazyka okolo 40 000 slova*. M.: Izd. Russkii iazyk.

ŽSO: Marica, D.

三谷恵子 2001. 「《グルシコヴィッチ『使途行実』断片》について — 初期スラヴ語文献研究への一貢献 —」 *Dynamis*, vol.5, 1-26.

——— 2003. 「クロアチアおよびボスニアの中世文献の言語分析ならびに南スラヴ語における位置付け」 (平成 12~14 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C))(2) 研究成果報告書).

——— 2003a 「完了形と過去時制—古チャ方言の用法に見る南スラヴ語の動詞体系の変化」 *Dynamis*, vol.7, 57-75.

Corpora

RN: *Klasici hrvatske književnosti. Epika, romani, novele*. 1999. Zagreb: Bulaja naklada. [CD]

PS: *Klasici hrvatske književnosti. Pjesništvo*. 2000. Zagreb: Bulaja naklada. [CD]

DK: *Klasici hrvatske književnosti. Drama i kazalište*. 2002. Zagreb: Bulaja naklada. [CD]

ASP: Josić-Višnjić, M. (ed.) *Antologija srpskih pripovedača XIX i XX veka*. Beograd: Filip Višnjić. [PDF]

Corpus of spoken Bulgarian collected by Cvetanka Nikolova

<http://www.hf.uio.no/east/bulg/mat/Nikolova/>

Fran Ramovš Institute of Slovenian Language ZRC SAZU

http://bos.zrc-sazu.si/nova_beseda.html

Zbirka slovenskih leposlovnih besedil

<http://www.ijs.si/lit/leposl.html>

Sažetak

Keiko MITANI

U većini slavenskih jezika (zapadnih i istočnih) nalazi se glagolska opreka neodređenog i određenog kretanja (kao što su npr. u ruskom: *idti - khodit', ekhat' - ezdit'*). U suvremenom hrvatskom (također i u srpskom i bosanskom) književnom jeziku, međutim, nema te opreke, i glagol *ići* (u ovom će članku biti označen ITI kao leksema) upotrebljava se i za bilo kakvo kretanje (određeni i neodređeni smjer, jednokratno i višekratno kretanje). U ovom je članku obraćena pažnja na tri glagola kretanja GREŠTI, ITI, HODITI (*gresti, ići, hoditi* u hrvatskom književnom jeziku) i njihovu morfološku i semantičku distribuciju na sinhroničnom i dijahroničnom aspektu.

U prvom je dijelu članka posvećena pažnja na suvremeni štokavski, odnosno suvremeni hrvatski književni jezik i suvremene čakavske govore te se pokazuje da je u štokavskom govoru glagol GREŠTI već postao marginalnim ili neaktivnim glagolom najkasnije u 19. stoljeću, dok se u čakavskim govorima on upotrebljava još i danas. Detaljno se opisuje kako se upotrebljavaju glagoli ITI i HODITI, i *hodati*, koji je izvedenica u štokavskom jeziku. Osnivajući se na Bachovoj klasiifikaciji glagolskih fraza (1986) i Dowtyevom pojmu "Incremental Theme" razlaže se kako glagoli ITI i HODITI izražavaju različite aspekte kretanja.

U drugom se dijelu članka istražuje kako su navedeni tri glagola obilježeni morfološki i semantički u staročakavskim tekstovima: izabrani su "Grškovićev odlomak apastola", "Vatikanski hrvatski molitvenik", "Istarski razvod", i "Dundolovo viđenje". Analizom tih tekstova nailazimo na sklonost da se glagoli GREŠTI i ITI pojavljuju kad je riječ o kretanju određenog smjera, a glagol HODITI češće se pronalazi u situacijama, u kojima se izražava neodređeno kretanje. Treba i istaknuti da su GREŠTI i ITI potvrđeni samo u oblicima sadašnjeg i prošlog vre-

mena i participa prezenta aktivnog, dok za glagol HODITI potvrđeni su, osim vremenskih oblika sadašnjosti i prošlosti, infinitiv, imperative i oblik l-participa.

Za zaključak može se reći: opreka određenog kretanja i neodređenog kretanja, koja ne postoji u suvremenom štokavskom (književnom) jeziku i suvremenom čakavskim govorima, može se vidjeti u staročakavskim tekstovima. Nije isključena međutim, Nemogućnost da se HODITI pojavljuje kad se radi o kretanju određenog smjera. U suvremenom književnom jeziku HODITI i *hodati* razlikuju se od ITI značenjem “kretati *nogama*” i tim se razlikovnim značenjem obilježno upotrebljava, kad se želi istaknuti da je kretanje “nogama”.

Summary

Keiko MITANI

The aim of this paper is twofold. First, I apply Bach's classification of verbal predicates (1986) and the framework of "Incremental Theme", proposed by Dowty (1991), to the semantics of motion verbs in Štokavian (i.e. standard Serbian-Bosnian-Croatian) and contemporary Čakavian dialects, and show that three basic verbs of motion, GREŠTI, ITI, HODITI in these South Slavic dialects are used to express both directed and non-directed movement. Furthermore, I examine morphological and semantic distribution of the said three verbs in Old Čakavian Language. My research reveals that Old Čakavian texts show an observable tendency that ITI and GREŠTI are used for directed movement, and the verb HODITI expresses non-directed movement.